

ピルグリムメイデン

深紅の巡礼聖女

狩野景

挿絵／ぼち。



あとみっく文庫／PDF立ち読み版



◎ 序 文	007
◎ 第一章	鋼鉄の処女	008
◎ 第二章	深紅の厄災	050
◎ 第三章	眠り人形	104
◎ 第四章	聖女の受難	145
◎ 第五章	銀翼のアリシア	212
◎ 第六章	安息の地	300

「まどろっこしい……真似しやがって……。さつさとあたしを殺さなかつたってことは、お前らの眷属にでもしようってつもりか？」

折れた両腕はどうした迷惑か治療がなされていた。それでも左右に広げられ、棘が食い込む茨の蔓で十字架へ縛り付けられている。鍬くわの効力なのだろうか痛みはない。両脚にも腰にもその棘蔓はがっちり食い込んで十字架への悪趣味な拘束を果たしているが、一切の苦痛を感じさせなかった。

いや、むしろ棘の食い込んだ箇所には、むしろ痒い心地よさが生じてすらいる。

「ふんっ！ 薄汚い不死者にされたって、お前の下僕になんかなるものかつ!! 永遠につきまとしててめえのやることなすこと、台無しにしてやるからなっ！」

先ほど盲目の女に打たれた鍬が、麻酔のような効果を發揮しているのだろう。目は覚めたというのに意識が集中を失い、思考が散漫になってしまう。

(これじゃ……奥の手も、使えないか……)

それらの回らぬ口で悪態をつきながらぼんやりと思う。

強がってはいるが実際に呪われた血に穢されたら、どれだけ自我が保てるか分からない。ストリゴイになればどれほど意志の強い者でも、それまでの人であった頃とはまったく異なった価値観でものを考えるようになってしまうという。しかも自分を不死者へと墮落させた祖主への忠誠心は、人が神に抱く畏敬など比べものにならないと聞いた。

これまでも、何人もの巡礼聖女が不死の怪物に墮とされ、敵の下僕と成り果て、そしてかつての仲間の手で塵へと朽ち果てていった。

この程度の鍼麻酔如きで頭をぼんやりとさせている自分が、不死者への激しい憎しみを保ち続けられるだろうか？　だがサンゲリアの言葉は意外なものだった。

『ああ、まったくだね。キミのその感服すべき気性の激しさじゃ、紫月〴〵につきまとわれる、漆黒〴〵のようになりかねない……。無理強いはやめておくとするよ』

(紫月……)

一瞬、苦い思い出が胸をよぎる。

ともかく敵に自分を穢すつもりがないことを知り、安堵が表情に表れぬよう唇を噛む。

『それよりも、キミのような強い巡礼聖女を不意打ちとはいえ圧倒したあの眠り人形、彼女〴〵は普通の人間だろうか？　それを人の意志と肉体を保ったままで、あれほどに身体強化させ、自在操作可能な武器に改造するなんて、どんな方法を用いたんだい？』

ようやくストリゴイが核心に触れてきた。興味津々に声が弾んでくる。

『ボクらの血で強靱な身体と不死性を得ながら不死者になることなく、普段は日が暮れても人としての特性を保っている。しかもその不死の血を滅ぼすことなくキミが注いだ処女の血液も同時に身の内を循環し、女性体へと肉体を完全に変質させることでさらに優れた身体能力を引き出す。——驚くべきことだよ。じっくりと調べただけで、さっぱり仕組

「みが分からなかったよ。ぜひ謎を知りたいんだ。教えてくれないか？」
敗北の原因。集中の続かぬ頭に屈辱と怒りが込み上げる。

「——どうやって、冬馬をあたしから奪った？ 冬馬に、いつの間に、なにをしたっ!!」
敵がこつそりと接触すればすぐに玲音にも伝わるはずだ。なのに、まったく気づかぬ間になにか仕掛けをされたらしいことはいまの言葉から分かった。

『質問してるのはボクの方だよ。教えてよ、^{ケルースニク}眠り人形^グの作り方。そうすればキミは自由にしてあげるよ。もう二度とボクたちには構わないって条件付きだけどね』

冬馬との接触を白状するつもりはないらしい。

「どうするつもりだ？ ^{クドラク}眠り人形^グで……」

それでも玲音は質問で質問に返す。ヤレヤレとぬいぐるみは短い両手を顔の横に掲げた。
『さつきも言ったとおりボクらはこの地で穏やかに暮らしたいだけなんだ。むやみに人を喰らうこともやめて、襲うのは始末に負えない犯罪者だけに絞っているし♪ キミが乱入してきた廃病院でもレイプ犯を懲らしめていたんだぞ』

よいことしてるよ、と言わんばかりなウサギ人形の得意げな態度に虫酸^{むしず}が走る。

『それなのに、異端審問局^{グリンズリウス}と来たら完全に管轄の外のこの国にまでキミを送り込んできて……。人を襲う振りをしてキミたちをおびき寄せ観察し、このままではボクらに安息は訪れないことを確信したよ』

「ふん、当たり前だ。汚らわしい不死者^{ストリゴイ}。お前らの行き着く先は地獄以外ない」

ウサギの顔が苦笑したような気がする。人間じみた動きで溜息を吐き、言葉が続ける。
『それならいつそのこと、決着をつけるのもいいかもって思ったのさ。キミの、^ク眠り人形^{スニ}の素晴らしい戦い振りを見てね。——処女の血液でも朽ち果てない。太陽の光の下でもボクらを超える能力を発揮出来る。そしてボクの意のままに動くことも確かめた』

いよいよ本音が出たと思つた。行き着くところ、人を喰らう不死者が人の間で暮らしてゆくなど許されるはずがない。呪われし人外には滅びあるのみだ。

『大量に作り出した^ク眠り人形^{ドラク}の軍団で、諸悪の根源である教皇庁^{ヴァティカン}を滅ぼし、この地に生者と不死者が共に暮らせる理想郷を築くんだ。すごいだろう？』

余りに陳腐な、ばかばかしくくだらない理想に怒りさえ込み上げてくる。

何よりもむかつくのが、ご大層にぶち上げながらサンゲリア自身が、そんな世界を作れるなどとこれっぽちも信じていないように感じられるところだ。

『あの組織にはキミも色々不信を感じているんじゃないのかな？ それでなければあんな、到底許可されるとは思えない人体改造の禁忌の技を編み出せるわけじゃないもの』

凶星を突かれた。だがなんだというのだ。一匹でも多くの不死者^{ストリゴイ}を殺せるのなら、禁忌だろうがなんだろうがいくらでも犯してやる。

『本当は異端審問局^{グリインスリーヴス}がどうなろうと、キミにとつてはどうでもいいことなんだろう？ だ

から、教えてよ、^ル眠り人形^グの作り方を」

「くそ忌々しい不死者ごときに教えると思うか!!」

口の中が切れている。悪態を返しながら唾を吐くと、血に赤く染まっていた。

『あつは♪ やっぱり一筋縄じゃいかないねえ、キミは。その強情で融通がまったくきかないところ、ボクは嫌いじゃないよ』

「てめえなんかにかれるくらいなら、死んだ方がマシだ!」

頭がぼやけ、身体にも力が入らない。声もいつもの迫力の欠片もないのだが、掻き集めた気力を振り絞り口汚い言葉をこれでもかどぶつける。だがサンゲリアはますます喜ぶばかりだ。

『さて、そろそろ効いてくる頃かな?』

「——? はうっ! な、なん……だ……!!」

ふざけた笑い顔の口の端をさらに吊り上げる。まさにその途端だった。

ゾクツ! と背筋が浮き立つ感覚が玲音を襲った。苦痛ではない。むしろ……。

「くふっ! あ、ああ……。な、なにを、しやがった……あたしの、身体……。ンクツ!!」

体温が急上昇し、全身から妙にヌメリの多い汗が滲み出してきた。

さらけ出したままの乳房が張り詰め、強張り勃つ乳首が切迫した疼きに苛まれる。

たまらず身を振らせた瞬間、

「ンあああつ！」

甘い痺れに全身を這われ、悩ましい嬌声が溢れ出てしまった。

淡く火照った肌の、茨の棘が食い込んだ箇所がすべて、ヴァギナのように狂おしい快楽を生み出す敏感な傷穴と化していた。

目が覚めたときから痛みはなく、身動きで棘に傷を抉られても火照りを伴った痺れしか感じなかった。いまでは硬い異物に穿られると、意識が遠のくほどの心地よさが弾ける。

処女膜を傷つけぬよう細い指を膣に挿入し、恐る恐る自慰に耽るよりも気持ちイイ。

極太のペニスを突き込まれ、存分に掻き乱されるとこんな快楽が味わえるのだろうかと思ってしまう。

『さっきの鍼でキミの性欲を活性化させてもらったのさ。キミたち巡礼聖女はボクらを滅ぼす処女の血液を保つため、セックスは御法度ごはつとなんだってね。それなのにこんなエッチな気持ちにさせられちゃったら切なくてたまらないだろう？』

まさにそのとおりだった。

下腹の奥で牝壺が急かすように脈打ち、股ぐらからヌメった雫が溢れ出てきてしまう。

『苦痛でいたぶってもキミはますます反抗心を強めるだけだ。だから仕方なくこんな方法を使わせてもらったよ。『眠り人形』の造り方を教えてくれないか？ クリムゾン・レイ

ン。そうすればこの発情を止めてあげる。キミを処女のままにしておいてあげる」
自然に腰が迫り出して窄めた股をかばんと開帳させてしまう。

弾む吐息に自分から身をくねらせ、鋭い棘に歡喜の傷穴がぐりぐりとほじられる悦感に背中を打ち震わせた。僅かでも気を抜けばあられもないこと口走つてしまいうさだ。

「そ、の……継ぎ接ぎの無様な、耳っ！ てめえで、ン……アア……。か、囁^{かた}つてろっ!!」

それでも不死者の要求に応じる素振りなど一切見せない。

『じゃあ、これならどうか？』

サンゲリアの方もこの程度で彼女が従順になるとは、これっぽちも思っていなかったようだった。いま侮蔑された長い耳をびよこんと立てて振る。

すると薄暗がりの中から湧き出るように、数人の男たちが現れた。

「——!! あ、ぐ……汚い、ものつ、見せるなっ！」

嫌悪感に顔を背ける。男たちは糸纏わぬ姿で股間を勃起させていた。

破けた修道服から乳房を露出させ、磔になりながら情欲に身を火照らせる玲音の姿に粘ついた視線を注ぎ、毒蛇の鎌首を思わせるその先端から濃厚な分泌汁を先走らせる。

冗談ではなかった。

男など巡礼聖女の能力を奪いかねない、不死者同様に忌まわしい存在でしかない。

(キモチ悪いだけ、だっ！ 男、なんてっ!!)

それなのに、身体の牝の部分が反応を示してしまう。興奮に扱き始めた彼らの勃起肉から生臭い汚臭が漂ってくる。不快な匂いだというのに、子宮の脈打ちが昂ぶった。

「く……うう……」

ガクガクと脚が震えて全身が萎える。その腿肌を止めどなく愛液が滴り落ちる。

「この女、やっちゃっていいんすか？」

「おっぱい丸出しでエロ顔してるぜ!! 乳首、コチコチに勃起まくってるし！」

じろじろと不躰ふしつけに眺めながら男たちが嘲ってくる。

恥ずかしさよりも怒りが込み上げ、睨めつけるが、

「そんな物欲しそうなツラするなって！ すぐぶち込んでやるからよ!!」

誘うような眼差しになっってしまったらしい。赤く染まった顔を悔しげに俯かせる。

玲音はいま初めて見る連中だが、彼らは冬馬たちが忍び込んだ廃病院で、相手が不死者とは知らず女性を拉致らちしレイプを行った男たちだった。

『駄目だよキミたち。彼女が自分から欲しがらるまで、挿入は禁止だよ』

あのとときに喰われ不死者として蘇生していたらしい。祖主の言葉に文句もなく服従する。『でも彼女の方から欲しがったら、イイんじゃないかな？ そういう気分させるのも

男の甲斐性かいしようってヤツだと思っよう』

ウサギ人形に止められ残念そうになった男たちの顔が、いままで以上に下卑た笑みをテラテラと脂ぎらせる。

『眠り人形の改造法を教えてください。気になつたかなあ？ シスター・レイン』

「てめえの……ンア……は、はらわたに……はう……オガクズでも詰めて遊んでろ！」

ヤレヤレといった様子でウサギ頭がかぶりを振つた。

茨蔓が玲音を十字架から引き下ろし、床に跪かせた。

その周りを、剥き出しの男根を屹立たせた男たちが取り囲む。

「——ひあああつ！ や、やめつ！！ くあああつ！」

初めて、彼女の口から弱気な悲鳴が迸つた。

いきなり彼らの一人が、男性嫌悪な修道女の頬へと土筆状に膨らみ尖つた亀頭肉を押し

当てていた。硬い芯の上にぶよつと気味の悪い弾力が被せられたその感触に、鳥肌がびつ

しりと素肌を覆う。

「く……うう……」

ナメクジの粘液を思わせるヌメリがべつとりこびりつく。その汁を塗りたくるように、

その肉切っ先は健康的な頬をへこませる強さで、縦横無尽に顔中を這い回る。

（気色……悪いッ！ こんなのだ！！ こんなのだっ！ ち、ちくしょうっ！！）

これほど近くでは初めて見るグロテスクな形状に目を固く閉じて堪えるが、魚が腐った

ような匂いが鼻腔に流れ込むと、うずうずと股間が切なさを覚えてしまう。

顔だけでなく身体に至る所を勃起竿が這い回っていた。特に冬馬との一戦で敗れた修道服から溢れ出た乳房を、左右一本ずつの極太にぐりぐりと捏ね回されている。

「ひいっ！ あ、はああっ!! んう……あ、ああ……ッ！ やめ……はふっ!!」

喘ぎ悶えないように気を引き締めるのがやつとだ。おぞましくてたまらないのに、触れた所から理性が崩れるような熱い疼きが膨れあがり、下腹の奥を挑発する。

「すげえ、愛液で水たまり出来そうだぜ！ おい、尻あ。もうさすがにおま○こ挿入て欲しくなつたんじゃないか？」

「なんならケツと膣、いっぺんに処女喪失させてやろうか!! 昇天するほど気持ちよくさせてやるぜっ！」

垂れ流し状態の膣液は、まるで失禁のように床へと止めどなく広がってゆく。

男への嫌悪。いやそれ以上に、屈してしまえばもう二度と不死者を屠ることは出来なくなるという事実が、玲音の自制心を支えていた。

『あはは、頑張るねえ。まあキミの方から求めない限り、処女を奪つたりはさせないから、安心してよ。でも、ゝ眠り人形の秘密を教えてくれたら、彼らじゃなくてキミが好きそんな可愛い女の子とキモチイイことさせてあげてもいいんだよ♪』

「えー。それ酷いっすよ。最後まで楽しませてくださいよっ！」

「俺、男嫌いなシスターの膣内に、精液たっぷりぶちまけてやりたいなあーっ!!」

教えてなどやらない。犯されるなんてまっぴらだ。いつそ死を選ぶ？ くそ食らえだ！
(生きていれば、あたしは負けないッ！ 処女でいれば、奴らをぶっ殺せるっ!! 一人残らずっ！ くそ……汚い、もの……ッ!! こん、な……。気持ちよく、なんか……)

全身を苛み続け、時が経つほどに強さを増す甘美な情欲を壮絶な気力で堪え忍ぶ。だが、膣ダメでも、口ならいいんだよなっ!! 慰めてくれよ、巡礼聖女さんっ!!」

顔中を黴っていた肉勃起がいきなり唇目掛けて押し当てられる。

劣情に掻き乱された身体は萎え弱っていた。

「——ふぎゅうっ!」

歯を硬く食いしばった唇がいとも簡単にこじ開けられる。

無理矢理に押し込まれる極太の侵入を許してしまい、見る見るうちに口腔をおぞましい風味が占めていく。

ぶよぶよとした弾力と硬さを兼ね備えた、ふてぶてしい感触に占領されてしまう。

「うぐうううっ!! ひやめをおっ! ぐええうっ!! きひゃな……ふがあんああっ!」
とつさに嘔み千切ってやろうとしたが、顎にまったたく力が入らない。唾液に薄汚い汚れが溶け出して気が変になりそうな酸味が舌を焼く。

その汚濁をグチョグチョと攪拌して、早速勢いのよいストロークが、容赦なく喉を殴り

つけて息苦しい嘔吐感をもたらす。

（ぐ、ああ……、こんなことつ。よくも、あたしにいつ！ くあはあつ!!）

それなのに下腹はキュンキュンと切ない疼きが子宮を絞り上げ、腰をはしたなく媚びるようにくねらせる。

「すげえっ！ おっぱいずぶずぶ、どこまでもちんぼ入ってくっ!! やわらけえっ！」

「ひいうっ!!」

乳首を深くまで陥没させて左右の乳房に男根が深々とめり込み、はち切れそうな圧迫感に意識が白濁した。

理性が一瞬弾け飛び、女陰並みに感度を増した傷穴にぐりぐりと棘を食い込ませ悶える。
「く……ほうあ……。んむおおああつ！」

膨れあがる衝動に、へっぴり腰で尻を後ろに迫り上げ、緩んだ股ぐらを慌てて引き締めようとする。だが、括約筋さえも、発情の前に堪える力を失っていた。

「ふああああああ………ツ!!」

—— じよぼっ、じよろろっ、じよぼじよぼじよばああ —— ツ!!
濃厚なアンモニア臭が、情欲そのままに熱帯びた湯気となって立ち上る。

漏らしてしまった。愚劣なストリゴイごときの前で失禁……。

「く……ううううっ！」



止めようとしてもますます勢いが増すばかり。ピストンを速める口中のペニスに押し出されているかのようで、惨めさが増し自尊心を抉る。

「おはああつ！ この巡礼聖女ピレリクメイデン、しょんべん漏らしやがったぜっ!!」

「うへえ、出てる出てるっ！ すげえ量多いなっ!! ちんぼくわえてたっぶりお漏らしっ！ しかも、しょんべん濃すぎっ臭ええっ!!」

はしゃぐ男たちの罵声を浴びながら、屈辱と苦痛に涙を溢れさせる。

レモン色のたっぷりな尿が水たまりとなった床にへたり込むことも許されず膝を着き、絡みつく茨に磔の姿勢を取らされ続ける。

『なかなか頑張るね。それじゃ、こんな所を責められちゃったら、どうかな?』

失禁に至っても、乳房と口中を陵辱する男根の勢いは和らぐどころかますます勢いを増してゆく。それなのにまだなにかされるのかと戦った瞬間、

「ひふっ!!」

思いがけない箇所への刺激に寒気が走った。

(は、あ、ああああ……ッ! うそ、そんな、とこ……ッ!! お、お尻いいいつ!?)

茨の触手が太さを増してのたうっていた。棘に覆われた幹肌がゴツゴツとした疣イボのような突起へとグロテスクに形を変える。その鈍く尖った先端が菊皺をほぐしてくる。

「んお、おとおおおおっ!」

慌てて括約筋を引き締めた。だがヴァギナからふんだんに溢れかえった愛液が尿と混じって尻穴までぐっしよりと濡らしてしまっている。

ぬぶっ！ ぬちっ！！ みちみちみち、ずぶんっ！

「——いひいはあああうっ！！ んおおおっ、ほあ、はあああああっ！」

ただでさえ限界の意識が爆ぜて、脳裏が赤く染まった。重苦しい便意に似た異物感が腹の中をふてぶてしく満たす。ほんの少し押し込まれただけで、必死に窄めていた褻穴が簡単に開いて極太をめりめりと啜え込んでしまった。

尻穴の中へ、まるで男根のように剛直した茨触手を。

「ほ、ほん……にやっ！ んふうううっ！！」

ぶりゅん、と尻の中で蠢かれただけで、直腸の壁が竦み上がったように痙攣する。

途端に乳房と口腔を犯す男根の感触まで高まり、情けなく悶えてしまった。

（ち、くしよお……。お尻い、なんか……。はあうっ！ く、そおおおっ！！）

心は屈せぬのに、身体が感極まってしまう。

「あ、ふああああっ！ はうううっ！！ ああああ——ッ！」

ズブズブ埋まり来た異物に腸奥を弾かれて、玲音は軽い絶頂状態に脳裏を白濁させた。

「放、しな、さい……」

「やつと捕まえたぜ。ちよこまかと逃げ回りやがって！——どうする？　すぐに連れてこいって命令だったが」

「同胞も大勢殺されたし、散々手間かけられたんだ。楽しむくらい構わねえだろ」

「——な、なにをつつ!? あぐうつ！」

唇から突き出た鋭い犬歯。赤く染まった瞳に下卑た笑みを浮かべる屈強なストリゴイ二名に、狭い通路から引きずり出される。

廃病院。ロビーの待合室。埃の積もったソファへと一人がどっかりと腰を下ろす。

背後から抱きすくめられる姿勢で、その男の膝の上へ座らせられてしまった。

「放せえつ！　忌まわしい、不死者……」

「へっ、ピルグリムメイデンのくせに、ずいぶんとご立派な乳してるじゃねえかよ」

「えっ!?　はわああつ！　や、やあああああつ!!」

——ブチブチブチツ、ビリリ——ツ!!　ぶりゅうんっ！

後ろから抱きすくめる手に尼僧服を引き裂かれた。

黒のブラジャーも千切れ、新鮮なミルクを煮固めたかのような爆房が、勢いよく弾け出て左右ぶつかり合いながら跳ね狂う。大きさはスイカほどはあるだろうか、重量感溢れるどっしりとした乳房は、ひとしきり暴れると砲弾型に拉げて地球の重力に屈した。

砲弾型とはいっても、その中にたっぷり火薬を詰め込んだ爆撃弾のようにどれほど拉げても丸みを失わない。その生房を無遠慮に揉み拉げられる。

「ひあああつ！ そ、んな……ところっ!! あううッ！ い、痛い……ッ!!」

無類の柔らかさにほとんど力を込められていない内から、指先がずぶずぶと深くまでめり込んでしまう。それでいて十分な弾力が備わっているらしく、指が離れると瞬時に美球は元の形を取り戻し、激感に波打つ身体に合わせてぷりんっと瑞々しく跳ね、永久機関のごとくいつまでも揺れ続ける。

寄せる必要もなく、みっちり合わさった狭間に深い谷間を刻む。

引き締まった身体から大幅にはみ出して育ちすぎた爆乳の、むんむんと甘い汗を滲ませた頂きにアンバランスささえ感じさせる小さな乳輪が薄桃に色づく。

小粒にそそり立った乳首が、不躰に注がれる男の視線に恥じらうように微震する。

迫力と奥ゆかしさが混じり合う並外れた乳房の蠢惑が、ますます不死者を漲らせた。気持ちよくさせようなどという心遣いは欠片もない。

ただ自分が蕩けるように極上な柔房の感触を貪ろうとする乱暴な揉み廻りに、たっぷりな美球が無残に拉げ、ぐにゅぐにゅとうねる。

「うはっ、スケベな乳だぜ。手にしつとりへばりついてくるぜ!! 処女のくせにこんな淫乱乳してるなんて、ろくなもんじゃねえな巡礼聖女は！」

「あうううっ！　ち、違うッ！！　そんな、こと……：された、からっ！　ひうっ！！」

「なにが違うんだよっ!?　こんな乳首固くしといて、とぼける気か？　ああっ!!」
生意気とばかりに不死者の指が、苛烈な刺激に強張った桃色小粒を深々と抉った。

「——ひぎいいいんっ！」

焼けるような激感に身が強張り、濃密な汗が肌から滲み出る。

「イイ声で鳴くじゃないか。おかげでこんなになっただぜ！」

もう一人の男が股間のファスナーを下ろす。

小高く盛り上がったそこから、涙眼をしかめて歯を食いしばる亜麻色髪の修道女の鼻ツラへと、赤黒くふんぞり返った赤子の腕くらいはある凶悪な怒張が突きつけられ、腐ったチーズのような汚臭を撒き散らす。

「——くうっ！　あううっ!!」

イボイボのような凹凸が竿一面をびっしりと覆い、異常なほど開いたエラがまるでコブラを思わせる亀頭。興奮にビクビクと打ち震える度大きさを増し、勃起の角度が急となつてゆく様に身の毛がよだつた。それなのに身震いが、ねっとり汗ばんだ乳白の爆房を、はしゃぐようにはむばむと弾ませてしまう。

「俺のこれも楽しませてくれよ。そのお見事なおっぱいでよおっ！」

「ひいいいっ、やああああっ!!」

みっちり密着した谷間を搔き分けて、ガチガチに硬直した感触が押し入ってくる。

剛直にべっとり纏わりつく汚濁汁がぬちよぬちよと、気色悪すぎて頭が狂いそうだ。

「本当だっ！ ペニスにもしっとりへばりついてくるな、この乳ッ!! 巡礼聖女がこんな男を喜ばせる肉体してるなんて、驚きだぜっ!」

「——く……あう……。ち、がう……う……ッ!!」

リズムカルに繰り返されるストロークに、ぶるん、ぶるるんっ、とはち切れそうな房が楽しげに弾む。男根が潜り込んだ内側は、反り返った棒肉にぐねぐねと捏ね回され、普段は外気にも触れない谷間肌にも、熱い疼きをもたらししてしまう。

滲み出た汗がカウパーと混ざり合い、攪拌かくはんされてぶちゅ、ぐちゅとくぐもつた音色を響かせる。その情けなさもジュリエッタの心を締め付けた。

「あうう……や、やめて……。え。お乳は、そんなことする所じゃ、ない……。はううっ!」
背後の男の指は相変わらず乳房を乱雑に揉み回し、しかも谷間がもつとしつかりとペニスを擦れるようにと左右から房を寄せてしまう。

泣き言混じりに敵の手を払い退けようと頑張るのだが、非力な細腕は強靱な不死者の怪力をどうにも出来ない。

抽送が勢いを増すにつれ、谷間から突き出た毒蛇のような肉鏃が口元へと迫る。

「ひぐっ! う、ぐあ……ッ!!」

吐き気を催す生臭い汚臭に呻き、必死に顔を背ける。とそのとき、

「おれもちろんぼ気持ちよくさせてもらおうとするぜ！」

パイズリに腰を繰り出す仲間が羨ましくなったらしい。背後の男が野太い声で宣言すると、掴んだままの爆房を引き千切らんばかりの勢いで引っ張り上げた。

「はぎいいいっ！」

両胸で弾ける激痛に慌てて腰を浮かす。

するとすかさず男が乳房を掴む手の、片方だけを放してしまふ。

「——がはっ!!」

体重が片方だけの乳房にかかり、気を失いそうになる。その間にも、パイズリストロークは止まることなく続けられ、千切れそうなほど伸びた肉房の根本を擦りたてた。

萎えた脚を踏ん張り、白目を剥いてガクガク震える。背後の男はそのジュリエッタのスカートを捲り上げ、中の大人びた黒いショーツを一気に破り捨てた。

「ひあああつ！だ、だめ……っ!!」

乳房を露出させたときと同様に乱暴極まりない。剥き出しにされた下半身が頼りない。

修道服を捲り上げられ後ろから男が覗き込んでいるかと思うとゾツとして、ハート形に熟れ実った肉感的な尻をキュッと窄めてしまふ。

その様にニタリと後ろの男が笑ったような気がする。

ジジジとファスナーを開ける音がした。

なにか重い質感がぶるんと飛び出した気配を無防備にされた股間の下に感じる。

「へっ、準備完了だ。すぐに、ぶち込んでやるぜっ！」

低くくぐもった笑い混じりに、男は手放した乳房をもう一度握り締め、再び相棒のペニスをしっかりと挟むように左右の乳房を弄び始めた。

「ひああっ!! や、やああっ! だめえっ!! あ、あ……。ふああんっ!!」

もう片方の手が乳房に戻ったことに安堵してしまう。両方の爆房を握り支え、再び巡礼聖女を座らせようと導く手に思わず従いそうになり慌てた。

「やッ、ああっ! それ、だけは……ッ!! イ、イヤッ! やめッ、あぐうっ!!」

処女の血によつて不死者を滅ぼすピルグリムメイデン。

彼女らにとつて処女喪失は戦う術を失うこと。死にも等しい絶望の所行。

慌てて脚を窄めた。だが座りかけな姿勢での女の股ぐらはどれほど固く閉ざそうとも、尻側からは完全に無防備な構造になっている。為す術もない。だが、

「ほっおあああああっ!!」

男の極太は、亜麻色髪 of 修道女が恐れた部分よりも僅かに後方、はち切れそうに肉付きのよい房球の狭間にめり込む。

「そっちはもうしばらくお預けだ。まずはこっちの方で楽しませてもらうぜっ!!」

危機感に括約筋が全力で引き締まる。だが鋼のように硬く怒張した切っ先は、いとも簡単に皺が寄った穴門をこじ開けてしまう。

めちいっ！ぬじっ!!ぎぢぢゅっ！

「ンッ！ギイ……………あああつ!!や、やめ……………くふっ！あうっ、はっ!!」

軋む狭門が、全身が緊縮するような狂おしさに見舞われた。

脂汗まみれになり目を見開いて、爪が食い込むほど拳を握り締める。

まだ潤っていないアナルへ、並外れた凶悪怒張が無理矢理めり込んで来ている。

(あ、があ……………ッ！お、お尻……………にいつ!!こんな、こと……………主がッ！はわっ!!)

壮絶な異物感が見る見るうちに肛門の内側を侵略してゆく。激しい便意に似た鈍痛に、腸壁が勢いよく蠕動ぜんどうして押し戻そうとするが、極太の突入はお構いなしに勢いづく。

——むりいっ！むちむちむぢっ!!ぶっずうんっ！

「がひいっ！ぐっ、あがあはああつ!!」

締め付けてくる腸肉を刮げるように、ペニスが根本まで埋まり込んでしまった。

ズゴンッ、と奥底を突き上げられて内臓全体が揺さぶられた。

肛門から身体の中すべてを怒張に占められてしまったような、圧倒的な存在感。

(ひ……………ああ……………。はいつて、入って、しまったっ!!不死者の、汚い、モノがっ!)

処女を奪われることはどうにか避けられたが、その代償としては余りにも衝撃的。

狂おしく熱い痛みが渦巻く直腸で、その勃起肉が勝ち誇ったように脈打ち続け、彼女の強張った身体を勝手にビクンッ、と痙攣させてしまう。

「尻も初めてみたいだが、もう感じちまってるみたいだな。呆れた聖女さまだぜっ!!」
「——ち、がう……ッ!! こんな……の……。ひはうっ!?!」

尻穴の狂的な感触は全身の感度をも高めてしまっているらしい。乳房の狭間をストロークするもう一本からの刺激に息を詰まらせ身をくねらせてしまう。

(ああ、わたしの、身体……。情けないです、こんな、ことで……。ソうつ!)

「気持ちいいようだな? だらしないうツラしてやがる! だが本番はこれからだぜっ!!」
肉棒一本にたやすく支配されてしまった屈辱に涙する。

そのアナルに、遠慮ない全開のストロークが襲いかかる。

——ずぼっ! ぐぼぼっ!! ずぶんっ! ぬつぶっ!! ずぼずぼずぼおっ!

「ふぎいっ!! がっ! あひはああっ!! や、やはああっ! 壊れひや、んぎいッ!!」
強烈な排泄欲に居座られた直腸壁が激しく擦られた。

腸液の潤滑が間に合わず、ギチギチと軋む内臓が削ぎ落とされそうだ。

削岩機のような切っ先に、腸の奥まった部分が乱打を受けて理性を弾き飛ばされる。
快感なんかない。苦しいだけ。それなのにキュンキュンと、穴という穴が窄まって自墮

落に粘液を垂れこぼしてしまう。

「この女、初めて尻突かれてるのに、股ぐらべちよべちよに濡らし始めたぜっ！」

「ひうう……っ!!」

切ない痙攣を続けるヴァギナから溢れかえる蜜を抑えることが出来ない。股を伝って男の膝へと垂れ落ちてしまう熱い雫を、ここぞとばかりにあげつらわれてしまう。

完熟乳房を揉む指はまた一段と乱暴さを増し、握り潰され変形した肉肌が痛々しい赤に熱帯びていた。内圧に尖り勃ってしまった乳頭が苦しいほどに痛痒い。

房の狭間に居座る怒張も、アナル突きと張り合うようにストロークを激しくさせ、はみ出した亀頭が唇を割ってぬぼっ！ ぐぼんっ!! と潜り込んでくる。

口中に苦みと酸味が異常に強い鱧えた風味が生臭く広がって意識が遠のきかけた。

いつそ失神出来れば楽なのだが、直腸を責め続ける激しい異物感に嫌でも意識をアナルへと集中させられる。

亀頭が何度も何度も何度も雁溝の辺りまで入り込んで、大きく開いたエラ傘で唇を内側から捲り上げ、恥垢とカウパーをたっぷり置き去りにして出て行く。

顔を背けようとしても、それより速く潜り込んでくる陰莖の先っぽに顔が正面へと固定されてしまった。唾液に溶けて口中に広がる汚濁を吐き出そうとするが、押し戻され思わず飲み込んでしまった。胃の腑が腐りそうなどろりとした喉越しにえずく。

「ふははあっ！ 舐めてくれるのかよ。ずいぶんと気前がいいなあ!! さすがケツ穴穿ら

れて喜んでるだけのことはあるぜっ！ 巡礼聖女さんよおっ！！」

「——?! わらひっ、よろこんれなんきや、なひっ!! ひあ、ああああっ！」

言いがかりを否定しようとしたその瞬間、排泄穴へのストロークが小刻みに変わった。

腸壁を刮げるようなダイナミックさはなくなつたが、代わりに不快部分をコンコンコンッ!! と立て続けに突きまくられてしまう。

「あうっ！ だめッ!! や……め、それえっ！ ひふうっ!! はわっ、わわああっ！」

苦痛が和らぎその分だけ、熱く痺れるような感触が剛直した先端の当たる部分から直腸いっぱい広がってくる。危険な感触に慌てふためくと、いきなり菊穴を占める極太がまたさらに、ずんむりと膨張した。

「ケツに喰らいやがれっ！ クソ聖女ッ!!」

「わひいっ!!」

もうイッパイイッパイな狭肉筒を無理矢理拡張され、便意が一気に跳ね上がる。

——どばびゅぶるううっ！ ぶびゅっ!! ぶばばああっ！

「ひいああああああっ!!」

蠕動を増して収縮する腸壁の奥へ、暴力的な噴射圧の濃厚スペルマが叩きつけられた。

S状結腸への直撃に意識が弾け白目を剥く。ぶぼぼっ！ ぐべぼっ!! と収まりきらぬ白濁が極太に栓された菊穴から弾けるように溢れかえった。そして、舌を突き出し狂おし

く喘ぐ口の中にも、乳肉を竿肌に絡ませたもう一本の怒張が突き込まれ、

「たつぷり味わって飲みなっ!! 淫乱聖女にはごちそうだろっ!」

——ぶびゆるびゆるっ!! びゅばっ! どびゆるびゅぶばあっ!!

夥しい量の白濁がぶちまけられた。

「んふううっ! ふごっ!! あぶぶぶぶばあああああっ!」

苦く、生暖かく、どろりと絡みついて固まる不愉快な濃度。鼻に抜けて脳裏を痺れさせる腐敗の香気に汚染される。反射的に口を閉ざしてしまったのが災いした。

そのおぞましい味わいの濁液が口いっぱいに満ち満ち、ジュリエッタの柔らかかなほつぺたを膨らませた。そしてあっという間に収まりきらなくなり、

「べぼはあああっ! うぐ……。えうっ、ぐ、ふはあ……。っ!!」

水風船が破裂したかのように一気に吐き出された。

当然かなりの量を飲んでしまい、喉にいつまでも絡み続ける不愉快な感触に呻く。

乱れはだけた濃紺の修道服が不死者の不浄な白濁に塗れ汚れていた。

「ひ……。ああ……。主よ……。こんな、こと……。お尻の、中にい……。っ!」

荒い息を吐けば喉奥の精液の風味が口へと溢れかえり、尻穴からは止めどもなくスペルマがぼたぼた零れ続けている。まだ直腸を満たす勃起肉は図々しく居座ったまま。

そのまま、不死者がすつくと立ち上がった。



「ねえ冬馬。ボクの茨蔓^{ステイグマ}、キミに一本貸してあげようか？ これを使って、キミがしたいように彼女を悦ばせてあげればいいよ」

ヴァギナからも愛液が溢れかえり、太腿を伝い落ちながら混ざり合う。その様を妖しく細められた赤眼で眺めながら、アリシアが声を弾ませる。

「え？ アリシアの茨蔓……」

「うん。冬馬の思ったとおり動くようにしたから、これ。形も好きなのに変えられるよ」
キョトンとする彼女^{かれ}の目の前に、棘に覆われた太い蔓が一本、ヌツと伸び上がる。

「こ、これ……。わ、本当だ。オレの思ったとおり、動く……」

ぐねぐねと蠢く。その先端が次第にグロテスクな鋸形に姿を変え、幹肌からは棘が消え去り青筋が浮き上がり節くれ立つ。

「あは♪ 冬馬のおちんちんと同じ形になっちゃった」

ドキリとした。

「——冬馬の、こんな……形……？」

散々にこの身体を辱めた男たちのペニスとそれほど変わらない。こんなものが冬馬の本当の身体についているのかと思うと、嫌になる反面、妙な昂ぶりを覚えてしまう。

「これで、玲音のお尻、気持ちよくしてあげるね」

微笑みかけられキュンと下腹の奥が切なくなってしまった。

尻穴が、わくわくと期待を膨らませ蠕動を始めてしまう。

「やめ……ろっ！ そんなの、いらな、い……あ、あああああっ!!」

両手を横に広げて固定されたまま、両脚が触手に持ち上げられM字に開かされる。

ぱっくりと局所が割れ開かれ、ぬめぬめの粘膜部が冬馬の眼に晒された。

この間にも表面をいぼいぼさせた触手は肌を這いずり回り、蕩ける愛撫で脳裏を乱す。

水蜜桃の尻房を左右に開かれ無防備にされた後ろ穴へと、冬馬に操られた男根触手がずぶりとめり込んできた。

「おへあああああっ!! う、うほああああ——ッ!」

菊皺を丁寧押し開いてくねくねとほぐしながら直腸を埋めてゆく。

アリシアが操る茨蔓や男たちに犯されたときと違って優しい挿入。それがいけない。

「あ、あ、あっ！ うそおっ!! やあああっ、これっ！ イイ……くなつちゃ、うッ!!」

髪を丁寧に愛撫されるように軽やかなストロークが始まると、もつと激しくしてもいと求めるように肛門がキュッと窄まって太幹にしがみついてしまう。

それでも性急にならず、奥をコツコツと少し物足りない程度に突き上げながら焦らすように勢いをほんの少しだけ強められ、もどかしさが膨れあがる。

（あ、うう……ッ！ 冬馬っ、お尻……、上手……いッ!! はあっ、ダメッ!）

腰がねだるようにくねってしまった。

ぬちゅ、ぐちつ、ぬぶ……ちゅつ、ずぼ……、ずぶんっ！

腸内に滲み出る粘液が粘りを増して、淫靡な音色が高らかに響く。

「冬馬にお尻気持ちよくさせられちゃって、すっかり女の子の顔、なっちゃってるね。いいなあ、気持ちよさそう……」

闘争心が真綿にくるまれ、締めりのない顔で息を荒くしてしまふ。アリシアの羨ましそうな様子に、優越感を抱いてしまふ。

男たちに粗雑に扱われた後の、甘く優しい陵辱に身も心も屈服させられそうさ。

「玲音、気持ち、いい……？ お尻……、されて……」

名前を呼ばただけでドキッとときめいてしまつた。

思わず、うん、と素直に頷いてしまふようになる。

「ふ、ざける、なあ。こんなの、全然、よくない……ッ！」

状況をきちんと思い返せ。目の前で薄ら笑いを浮かべるガキのような牝は、不死の女王。憎むべき敵だ。そのクソ女に簡単に操られてる役立たずのポンコツ眠り人形。

憎しみで頭をいっぱいにする。こんな辱めに屈してなるものか。怒りをぶちまけろっ！

「そっか、じゃあ、もつと強く、お尻、掻き回すね」

——ぬぶっ！ ずぼっ、ずぼずぼずぼズンズンッ！！

「ひいいんっ！ ふああっ！！ ンあはああああっ！」

ああ……、お尻気持ちイイ♪

「いっばい、締めつけてきたっ!! 玲音のお尻ッ! オレの挿入られてっ!!」
「ぐうううっ!! ち……が……。んぎいいうううああっ!」

アリシアに与えられた茨蔓ペニスの感触が伝わっているとでもいうのだろうか? まるで己の男根を実際に挿入しているかのように冬馬が声を弾ませる。

「おっぱいも、凄い……。玲音の……。乳首、真っ赤に膨らんじゃって」

男たちにビスチエを無残に破かれ露出した、食べ頃の桃果みたいに熟れた美球乳をまじまじと見詰められる。

「見る……なああっ! こんな、のっ!! ——ひああっ、お尻ッ奥ッ! んああ……!!」
恥じらいに思わず胸へ意識を向けた途端、アナルが弱くなって脈打つ喜びに飲み込まれそうになった。

「ほら、オレのおっぱいも、乳首、痛いくらいキツキツ、なっちゃって……」

照れくさそうに、彼女がシャツを捲り上げてぼろんと、弾け出た自分の乳房を見せてくる。玲音の胸より若干大きく、つやつやと汗ばんだ桜色の美球をむっちりさせていた。

「——ッ! 男の、くせにいいっ!!」

そう思ってもドキドキと妙な動揺に胸が高鳴る。サクランボのように乳首を張り詰めさせた自分の乳房と見比べて悩ましい溜息を漏らしてしまう。

「いいなあ、二人ともおっぱいおつきくて。ボクの、ひんにゅーだから……」

もう一つの溜息が重なった。ブラウスをはだけてみせる平坦な胸は、幼げな容姿同様に膨らみもささやかだ。そのみすぼらしさを嘲笑って気力を取り戻そうと思うが、

「オレ、アリシアのおっぱいが、一番好きだから。可愛くって、とても感じやすい、アリシアの、おっぱい……。ン……」

冬馬が優しい言葉をかけながら、不死の女王の小粒な乳首へチュッとキスをした。

「はあああん♪」

幸せそうな喘ぎを上げて小柄な魔女が身をくねらせる。

「く……のおっ！」

仲睦まじい様を見せつけられ切なさど怒りが胸に逆巻いた。

「でもごめん。いまは玲音のおっぱい、気持ちよくさせたいから」

「うん。いいよ、冬馬。ボクも彼女が悦ぶの見たいから、してあげて♪」

憤りの反動で期待に心が浮かれてしまう。理性はだめだと警告するのだが、つい身体を前のめりに乳房を突き出してしまふ。

膨らみの裾野に触手が巻き付いて根本から絞るように乳房を圧迫してきた。

「ひぎいいいっ!!」

爆ぜそうなほどに内圧が高まり、感度が際限なく高まった。

「玲音……」

むちゅん……ん

その狂おしく疼きまくる乳首へと、冬馬が嬉しそうに自分の乳首を押し当ててきた。

コチコチに強張った硬粒からスパークが弾け、むっちり重なり合う柔肉に密閉される。

「はああああ〜ンツ!!」

「ッ————!! へ、げああああああ————ッ!」

冬馬の甘い喘ぎを掻き消して悲鳴のような嬌声を張り上げる。自分が提案したのに先にジュリエッタとされてしまった淫靡な遊戯を、この状況でされてしまった。

意識がストロボライトのように激しく点滅する。

荒く喘いでいるのに息が苦しくてたまらない。鳥肌が立つほど激烈な快感に、縮こまって蠕動するアナル襞を口径を増した剛直が抉り返す。

——ぬぶつ! ぞぼつ!! ずぶずぶずぶつ! ぐぢゅつ!! ぶずんつ!

「ひあああつ!! おひつ! お尻ツ!! いやあああああつ! ふあああああつ!!」

腸内で幹肌を覆う疣隆起がうねうねと形を変え、蠢く襞にびっしりとまんべんなく密着して、ストロークを過熱する。

内臓ごと揺り動かされる圧倒的な甘美が脳天にまで響いた。パクパクと喘ぐように肛門が開閉を繰り返し、もっと奥へと蔓肉を飲み込もうとしている。

「ああああ……お尻で、気持ちよくなってる玲音、なんか、可愛い、かも……」

「ふええっ!? ば、ばかあつ! そんな……いうなっ!! 冬馬の、くせにい!」

思いがけない言葉に、虚を突かれた。むかつく。それなのにどうして鼓動が速まり胸がじんわりと熱くなるのか分らない。身体の感度が一気に高まってしまった。

むちゅ、くちゅきゅぷっ! ぷりゅんっ!! にゅぷっ!

「ふわ、わ、わ、わあああああつ! やめえつ、乳ッ、や、ふはんっ!!」

何度も硬直した乳首同士がぶつかり、火花が散るような喜悦に身震いしてしまう。

思わず自分から尻を迫り出してしまっていた。その狭まった穴の最深部へと、

——ぎゅずゅっ!! ぎゅるるるじゅずずっ! ずぶずぶずぶっ!! ズッブブンッ!

(ひあああつ! な、なに、こ……れえっ! わひいつ、ま、回って……おほおっ!!)

ドリルのような回転で纏わりつく腸壁を刮げて極太が突き進む。

ズドンッ!! と重々しい響きで腹腔を揺るがし、腸奥を力強く突き上げた。

「ごふうっ!! ぐううっ! ふ、ふはあああッ!! んふううああ——っ!」

くるんと白目が裏返って背中が反り返った。決壊した堰のように、喜悦が止まらない。

「と、とーまにい、おしりでエ、イ……イかされ……」

男たちに受けた屈辱的な仕打ちの後の、優しく心地よい陵辱にたわいなく屈してしまう。

「ン、あ、あああああッ! う、うそっ!! ひゃふっ! お、おおほあああつ!! く



るっ！ お、お、お尻ッ！！ き、来ちゃ……ッ！ あ、ひんっ！！ ひいいいんんッ！
 イイイイイツ、イクう、イツちゃふああああううう——ッ！！

ぷっしゅああ——ッ！ びゅじゅう！！ ぷしゅぷじょおおおうううっ！

失禁なのか絶頂の潮なのか自分でもよく分からない。

アナルの奥からも熱い飛沫が溢れかえった感触がする。

甘く爛れた狂おしい香りを振りまく歓喜の蜜液をM字に開帳された股ぐらから嘖きこぼして、まだ貪欲にキュンキュンと菊皺を締め付け極太を味わいながら玲音が何度も痙攣の揺り返しに息を詰まらせ喘ぐ。

「は……ああ……。んッ！ ふあ……」

幸福感が膨れあがってきて闘争心が削がれてしまう。

（あ……うう……イ、イかされ……たあ……き、もちイイ……。気持ち、よく……ッ、されたあ……）

無理矢理に怒りを奮い立たせようとしますが、理性が生温く蕩ける心地は治まらない。

（蕩け……る……。股、あ……。いつぱい、えっちな、の……垂れて……。はんんッ）

開きっぱなしな膣穴から滴り続ける絶頂汁を意識すると、キュンと子宮が収縮して、濃厚蜜をますます派手に飛び散らせてしまった。

パールを被った紅いツインテール髪も、蕩け緩んだ美貌も生臭い白濁がこびりついて

いる。淫らな牝本性を解き放たれ艶めかしくくねる肉体に、引き千切られた紅衣と純白だったアンダーウェアが汚濁にまみれてべっとりへばりつき、退廃の色香を醸し出す。

その様をうっとり見詰めながら、女性となつても少年めいた雰囲気が消えない冬馬の顔が、発情に呆けて近づいてくる。

乳首はまだ密着したままで、にちゅ、くちゅ、と擦れ合う度喘ぎが漏れた。

（ふあ……冬馬、の唇……。あ、ああ……!! キ、キス……すれば、冬馬……眠り人形、出来るッ！ あたしの、操り人形!!）

快楽に蹂躪される頭に光明が差した。アリシアに奪われたとはいえ、再度の口づけで彼女かれの主導権を奪い返せるのではないだろうか。たとえそれがほんの僅かだとしても、この最悪の状況から逃れるくらいは出来るかもしれない。

唇を噛んだ。血が滲む、痛みがほんの少し理性をシャキッとさせる。

「冬……馬……あ、ん……、あ、——あうっ！」

もう少し。あと数センチ。唇が触れあう寸前となつたその寸前、

「ん……あふ……、冬馬……♪」

不死の女王に横取りされてしまった。彼女かれの顔を強引に自分へ向かせると、アリシアは見せつけるように唇を合わせて舌を絡め合う。

「あは、らめらよ……。えっちは許ひへも、きしゅ、は恋人のものよ、なんらから……」

えた微笑で冬馬を見詰めながら、次第に遠ざかってゆく。

「また遊ぼう、冬馬。デート、本当に、楽しかったよ♪」

「アリシアッ！」

速度を増し、高く小さく消えてゆく。呼んでもすでに声は届かない。

月の銀輪に溶け込むように飛び去った少女を呆然と見上げてみると、

「――なにが、ありしあゝ、だ、この色ほけクズの女男がっ!!」

体力限界なはずなのに口汚く罵ってくる声に雰囲気は台無しにされた。

「玲音……」

「てめえ、あたしになに突っ込もうとしていた!! ああっ!! それにあんな化け物が学園

にいるの知ってて、あたしに内緒にしたな……? くそっ、知ってれば今頃お前おとりにし

てあのロリババアぶっ殺して、契、約……」

さすがに限界だった。気力で立っていた身体が、糸が切れたようにガクンと崩れた。

「――おわっ! 玲音ッ!! 大丈夫かっ!? れ、玲音……」

慌てて駆け寄り抱き留める。

波打つ黒い光が消えかかっている魔法陣へと足を踏み入れたその刹那、

「――ッはあ!! な、なん……だ……だ……!!」

少女の姿をした冬馬の股間へと、いきなりなにかが飛び込んでくる感触があった。

壁に心地よい痺れが走り、思わず腰をくねらせてしまう。下腹の奥に入り込むと、何度か激しい脈動で子宮を揺さぶり息を詰まらせる。だが、それだけで後は静まりかえったように何事もなく、^{かれ}彼女^はは呆気に取られ立ち尽くした。

手で下腹を探って確かめるが特に違和感はない。

(ツ——いまの、いったい……？ この身体も、まだよく分からない状態だし……)

いつか戻れるときは来るのだろうか？ それとも、アリシアに誘われたように彼女と共に永遠を生きるしかない定めなのだろうか？

答えの一端を握っているであろう深紅の聖女は、腕の中で安らかな寝息を立て始めた。

「あ……冬馬、さん……。無事でしたか……」

意識が戻ったらしい、ジュリエッタがよろめく足で駆け寄って、お、遅い……、いつもの三倍。冬馬の方から玲音を抱えたまま近寄ると、息切れしながら朗らかに笑う。

「シスター・レインも無事ですか」。今回の任務はわたしの活躍で窮地を脱して一件落着いて感じですね。報告書はどうせわたしに書かされますので、本部にはそのように伝えておいて……。——ひゃうううっ！」

案外と凶太くしたたかなところもある。その亜麻色髪の後輩を、意識を失っているはずなのに顔をしかめ、少年の腕に身を委ねる玲音が蹴り飛ばす。

苦笑する冬馬を、銀色の月が穏やかに輝きながら見下ろしていた。

第六章 安息の地

「で、なんでまだいるのさ？」

「はあつ？ あつたりまえでしょ！ 銀翼のヤツをぶつ倒すまであたしは帰るつもりないから!! この学園はヤツが根城にしていた場所。手がかりが山ほど残されてるし、しばらく通うつもりよっ！」

だ、そうだ。昨晚の激闘を洗い流した雨は上がり、雲一つなく晴れた初夏の日。

巡礼聖女、紅坂玲音は隣席でふんぞり返り仏頂面で冬馬を睨めつけた。

不在の間、彼女の存在を忘れていた級友たちも何事もなかったように再び認知している。さらにはジュリエッタまで玲音と共に編入してきた留学生、ということになっている。しかも同じ学年の同じクラスである。

(確か、ジュリエッタって、オレらより年上って聞いた気がするけど……)

まだ疲れも癒えぬのに無理矢理登校させられ、その爆乳と美貌に惹かれたエロ軍団にチヤホヤされながらも、うつらうつらと眠そうに船をこぐ。

「なあ……お前ら……」

その中の三人。一緒に廃病院へと忍び込み、不死者に喰われたはずの悪友たちにおずお

ずと声をかける。だがその声も耳に入らぬ様子で、彼らは居眠りの修道女に夢中だった。

「おばあいいッ！ ジュリエッタたんのおっぱいばんざいいッ！！」

「はくくくくッ！ 一晩中懺悔聞いて欲しいな、ジュリエッタたんく！！」

「玲音様にいたぶられるのもたまらんが、ジュリエッタたんに甘えるのもなかなか……」
まあいいかと思つた。いまとなつては自分も同じようなものだ。眠り人形へと改造され、人外の存在となつてしまつた身体。

「放課後に、あのヤツのいた部屋調べるわよ。あんたにも手伝つてもらおうから！！」

吹っ飛んだ生徒会室は不審な爆発事故として、いま現場検証がされている最中だ。

アリシアと初めて愛し合つた場所。銀の翼羽ばたかせ、空の月へと消えていった彼女の姿を思い浮かべる。

「おっはよーッ！ 冬馬っ♪」

その本人が、唐突に後ろから抱きついてきた。

「ええっ!? ア、アリ……シア……ッ？」

気のせいではない。正体を明かし、熾烈な戦いの果てに去つていった不死者の女王が何事もなく登校してきた。しかも宿敵である巡礼聖女がいる冬馬のクラスに立ち寄つて。

「昨晚は楽しかったねえ！ 冬馬が、激しくするから、ボク、すっかり興奮しちゃつたよ!! また近い内に遊ぼうね、そちらの二人も」

意味深なセリフをはきはきとした声で言うので、クラスの連中が余計な妄想を膨らませざわつき始めた。物静かなおかつば髪少女、玉井奈々子は何故か愕然と項垂れているのを、友人たちが一生懸命なだめている様子が、視界の隅に入る。

それよりもギョツとする光景が目の前で繰り広げられつつあった。

「てめえ、逃げ出したと思つたら、こんな朝つばらにこのこやつてくるなんて、いい度胸だな……。探す手間が省けたぜ、ストリゴイ……。ッ！」

殺気がありありと滾らせて玲音が剣呑な視線を注ぐ。

「ボクの学園だからね。登校してくるのは当たり前さ。それより、こんな所で戦^やるつもりなのかい？ 一般生徒がたくさんいる、この学園で。その中にボクの仲間もたくさん潜んでいる、この学園で」

太陽の下では不死者の力は常人に等しい。万全にはほど遠いいまの玲音とはいえ、アリスアを倒すのは造作もないことだろう。しかし、

「こんなにいる中で事を起こせば、警察がやってくるよ。巡礼聖女の存在など伝えられていないこの国の警察がね……。キミらがこの国で犯罪者なんかになっちゃつたら、異端審問局は、どう対処するのかな〜♪」

「上等だッ！」

脅しの言葉にも深紅の巡礼聖女は怯まなかつた。

「だ、だめです、シスター・レイン！ 問題起こしたら、下手するとわたしたちまで組織に追われる羽目になってしまいますからっ!!」

慌ててジュリエッタが止めに入る。

「うるさいっ！ あたしはこいつを倒すんだっ!! 異端審問局グリーンスリーブスなんか知るかつ！」

二人が採めているその隙に、

「ねえ、冬馬ってばさ。女の子の下着って持ってなかったでしょ？ 天気もいいし、授業サボって買いにいっちゃおうか。ボクが選んであげるよ！」

「えっ!? うわっ、アリシアっ!!」

屈託のない笑みを満面に浮かべて手を引っ張ってくる。

抗えるわけなどなかった。この笑みが偽りなのか本当なのかは分からない。

けれど自分の彼女に対する想いが真実であることは自分が一番よく知っている。

「ああっ！ 待てっ、このロリババアっ!! てめえ、冬馬をどこへっ!？」

「はわ、だ、だめですう！ 昼間とはいえ不死者などに冬馬さんは渡さないのですっ！」
クラスメイトたちのどよめきを背に、教室を飛び出す。

後を追いかけてくる玲音とジュリエッタの声に振り返りながら、冬馬はアリシアとつないだ手をしっかりと握り締めた。その確かな感触をしっかりと噛みしめるように。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価/690円(税込)



魔界最強のプリンセスがドレイ志願!
『当方Mドレイ希望』



全国書店で
好評
発売中

不死の吸血姫がドSのご主人様を募集
しているようです
【小説：酒井 / 挿絵：にの子】

思春期なアダム3

二人泣きの子猫

【小説：さかき傘 / 挿絵：天海雪乃】

2010年
7月下旬
発売予定!!



「…藤田君は責任取るべき」

睦月への想いに身を焦がすマキナ
彼女は夜の教室で……!?

借金お嬢クリス3

令嬢はいかにして
42兆円を返済したか?

【小説：筑摩十幸 / 挿絵：了藤誠仁】



全国書店で
好評
発売中

クリス、悪魔堕ち!?
「愛するシクレット様のため、
死んでも構いませんわー!」



既刊LINEUP

全国書店で好評発売中

- 仙宮守聖戦姫 / ナナガシ ①～③
- 拘束 / 帝都少女探偵団 赤い探路を駆て!
- BLANGEL 輪になりて踊る悪者の夜

- 借金お嬢クリス ①～②
- プリンセスリバーシ!! 交錯する美姫と魔姫
- 無敵の姫騎士がMMに目覚めたようです

- ビルクリムメイデン ①～②
- 呪詛喰らい師【カースイーター】
- 魔界少女ルルイ・エルル



あとみっく文庫

既刊情報

仙獄学艶戦姫ノブナガツ!

第一次水着大戦

超能力者の少年少女たちが集う特殊な学園——西開学園、北宮学園、聖ジョウント学園。それぞれが仙獄島の覇権を求め、ちょっとHな三つ巴バトルの幕が開ける!! 平和なはずのミスコン勝負は、暗殺騒動が起きたり水着美少女が縄で緊縛されたり触手生物が現れたり、とんでもない方向に進んで——!?

小説●斐芝嘉和
挿絵●SAIPACo.

全国書店で
好評
発売中

仙獄学艶戦姫ノブナガツ! 弐

北宮学園生徒会長選挙戦

絶対的な権力を誇る北宮学園の生徒会長の座を競い、義元、氏康、晴信ら北宮三大美女はもちろんのこと、長尾く美姫)景虎、宇佐美く奈々)定満といった新ヒロインも加わり、エッチにバトルを繰り広げる!! 敗北したヒロインは勝者の奴隷に!?

小説●斐芝嘉和
挿絵●SAIPACo.

全国書店で
好評
発売中

詳しくはKTCの
公式サイトで <http://ktcom.jp/>



仙獄学艶戦姫ノブナガツ！参

信玄、出陣！

北宮学園の生徒会長選挙戦も大詰め。肉欲に堕ちた義元と氏康を従えた景虎は、更なる戦力の拡大を図る。そんな中、信玄は元凶である按針を倒そうと信長に協力を求め、聖ジョウントのエリザは封印された化け物を発見する。様々な思惑が交錯する物語は佳境を迎え、信長は姦落の危機に陥るのだが!?

小説●**斐芝嘉和**
挿絵●**SAIPACo.**



全国書店で
**好評
発売中**

BLANGEL

輪になりて踊る患者の夜

月下の街を紅に染め上げる、鮮血のサスペンスアクションの幕が上がる! 吸血姫アリシアは異形の生物「被験体」の影を追って戦い続けるが、予想もしない反撃に遭って虜囚の辱めに晒されてしまう!! 『隔月刊コミックヴァルキリー』の長期連載人気漫画が待望の小説化!

小説●**夜士郎**
原作・挿絵●**渡瀬行人**



全国書店で
**好評
発売中**



あとみっく文庫

既刊情報

思春期なアダム

謎の少年ルシアの手で“蛇眼”の力に覚醒した藤田陸月。世界の半分を支配する秘密を秘めた彼をめぐり、天使と悪魔そして人間による争奪戦が始まった！ごく普通の少年の日常は一変し、美少女天使のエンジュや憧れの同級生伊部草マキナまで巻き込み、激しくそしてエッチに胎動する！

小説●さかき傘
挿絵●天海雪乃



全国書店で
好評
発売中

思春期なアダム 2

背後をならう者

「世界の半分を支配する力」を秘めた“蛇眼”の持ち主として、天使たちに保護されたごく普通の少年、陸月。それでも普段通りの学園生活を送る彼の前に、新たな刺客が現れる…。天使・悪魔・人間の三つどもえのバトルはより過熱！“蛇眼”をめぐり迫り来る美女に美少女&美少年(!?)たちの誘惑で、陸月も新たな局面に…?

小説●さかき傘
挿絵●天海雪乃



全国書店で
好評
発売中

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトで <http://ktcom.jp/>



あとみっく文庫

既刊情報

借金お嬢クリス

42兆円耳を揃えて返してやりますわ

異世界の住人・ジグレットの奸計で父を失い、突如無一文となった令嬢クリス。なんとその借金額は42兆円! クリスは借金取り立てに現れた武装精霊ガーランドの力を借り、ジグレットへ借金返済の戦いを挑むことに! 果たして、傲岸不遜な令嬢はセレブな日常を取り戻し、己の貞操を守ることができるのか!?

小説●筑摩十幸

挿絵●了藤誠仁

全国書店で
好評
発売中

借金お嬢クリス2

42兆円踏み倒してやりますわ

セレブから無一文に転落したクリスは、借金を返すために今日もバイト&バトル!? 水着コンテストで痴態を晒し、工事現場で肉体労働&ガーランドからの肉体調教と、八面六臂の活躍(?)に加え、ライバルのロリ令嬢、サキも加わり、エッチ&借金バトルはより熱く燃え上がる!

小説●筑摩十幸

挿絵●了藤誠仁

全国書店で
好評
発売中詳しくはKTCの
公式サイトで <http://ktcom.jp/>



ピルグリムメイデンⅡ

白装の騎士

チェーンソー片手に深夜の街を駆け抜けるシスター玲音。彼女は最近不死者たちとの戦いがなくて欲求不満気味。そんな少女の前にユージーンと名乗る不死者が現れる。彼はなんと失われた玲音の過去を知る者だった。明らかにされていく巡礼聖女の辿りし遍歴——そのすべてが繋がった時に見える衝撃の真実とは!?

小説●狩野景

挿絵●ぼち。



全国書店で
**好評
発売中**

呪詛喰らい師

カースイーター

人の強い想いを糧とする半妖神——淫神。常盤城咲妃は、呪印術と「ウズメ流神伽の戯」を駆使し、時にはその豊満な身体を差し出して彼らを鎮めていた。そんな彼女が派遣された街では淫神事件が次々と起き始めて……!?! 迫りくる魔の手から友を守るため、咲妃は淫らな戦いに身を投じる!!

小説●蒼井村正

挿絵●或十せねか



全国書店で
**好評
発売中**

詳しくはKTCの
公式サイトで <http://ktcom.jp/>

コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト <http://ktcom.jp/>



title:

ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』

トキサナ

『DSの流儀』

chaccu

『生徒会長前哨戦?』

天道まさえ

title:

発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉



電子書籍版もあります!

各種ダウンロードサイトにて発売中! ※18歳未満の方は購入できません。

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
来かねる場合がございます。お問い合わせはメールでもお手数ですが再度お問い合わせください。
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!